

No. 94
公民館だより
 平成6年12月
 宮津市字由良
 由良の里センター内
 由良地区公民館

由良岳・森ヶ鼻道によせて(一)

館長 山下 清 一

森ヶ鼻道のKTR踏切から仰ぎ見る由良岳は、東は舞鶴境から、西栗田境まで、誇らしく、裾の尾を拡げ、東北を向き少し気取った恰好で私達に笑顔で語りかけているようです。

遠く奈良時代の開山と聞きますが、大陸からの渡航船、出雲族の来航を、また蜂子皇子の船出や「安寿」、「厨子王」の真実を、時代を経て、江戸時代から明治へと、由良の里での出来ごと、人々の暮らしや先祖のこと等、太古から今日まで、丹後の移り変わりを見詰めてきた由良岳、世々の跡を尋ねてみたいと、深

い感慨に耽ることがあります。中腹から山麓にかけての緩やかなスロープは、いかにも大山らしくゆったりとした山容を誇り、春の萌える若葉、秋の陽に輝く黄や紅葉は、私の気に入っている景色の一つです。

踏切から左に道をたどると、森ヶ鼻道です。かつての道や川は跡形もありませんが、私の臉には、大きく蛇行する懐かしい川や道を、はつきりと思い浮かべることが出来ます。今は「ほ場」に人影もなく、晩秋の気が満ち、寒い冬の訪れを静かに待っている風情です。次回から、お

ぼろげながら、森ヶ鼻道での遠い思い出を拙文ながら書き記してみます。

行事報告

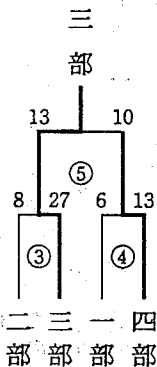
主事 酒田 治

●四部対抗球技大会

八月十四日(月)

由良地区恒例のお盆球技大会が行なわれました。昨年は雨の為中止となりましたが、本年は猛暑のなか和気藹々、暑さも忘れ熱戦が繰り広げられました。結果は次のとおりです。帰省出場された皆様大変ご苦勞様でした。

一般男子ソフトボール



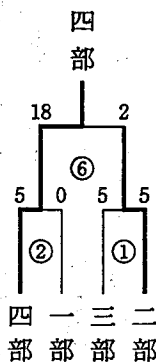
●盆おどり大会

八月十四日(日)

当日は球技大会に引き続き、夜は盆踊り大会と公民館総動員で行事を行いました。

猛暑の続く毎日、夜になってやっと涼しく、ボンボリに灯が点り、婦人会の連、有志の方の連を先頭に、海水浴のお客さんも多さん見えられ、踊りの輪もだんだん大きくなって来しました。

青年男子軟式野球



(二部、三部ジャンケン)

お客さん「簡単そうやけど仲々むずかしいなあ」。最初はギョチナイ身振りでしたが段々上手になるころ時間が来てしまふ。「来年も来られたら又踊ろか」なんて会話も聞かれるお盆の夜でした。

お客さん来年も是非来て踊って下さい。待っています。

地区の皆様もお客様に負けなように仰山来て下さい。

●第二回芸能サークル発表会

十月十六日(日)

当日は舞踊のかかし座、まろじ会、大正琴の琴遊会、琴修会、照誦会の仕舞、詩吟同好会の剣舞、書道・華道・茶道吟とサークルの皆様による発表会を開催しました。

それぞれのサークルの特色を存分に発表され短い時間ではありましたが多くの皆様の心の中に温かな思いを持たせていただいたことと思います。

お忙しいなか練習を重ねられ出場いただいた各サークルの皆様

様に厚くお礼申し上げます。

●文化祭

十一月六日(日)

夜半雨が降り翌日心配されていた天候も回復し、十時を過ぎる頃には次々と観客も見え、会場は大変な混雑となつて参りました。

展覧会場には、生花教室の生け花が優雅に会場を包み、小学生、中学生の絵画、書道、小学生の可愛い工作、引き込まれそうな写真、昔を語りかけて来そうな能面、油絵かなと言つて見おられたちぎり絵等々、それぞれの特色に観客も足を止め、しばし見入っていました。

又お茶席では、どうーしていただいたらいいのかなと思案をしながらもお茶の味わいを、心落ち着く思いでいただいたと思います。一方会場の外では、盆栽の縁り菊の一輪に見入り、婦人会のバザー、うどん、ぜんざい、有志の方の喫茶コーナーも大盛況でした。

生涯学習教室では芸能サークル発表会等のビデオの放映、昼食会場にも坂本同さんの協力によりビデオを放映し、盛大に終了することが出来ました。

たくましく生きる児童の育成をめざして

宮津市立由良小学校長 飯 田 和 子

朝日にはゆる由良の嶺、万波はるけき日本海、正気あふるるこの里に——と、校歌にもうたわれている素晴らしい自然と、地域の温かい人情に包まれた由良小学校では、『豊かな心をもち、たくましく生きる児童の育成』をめざし、教育活動を続けております。

具体的には、めざす子供の姿として、次の三つをあげています。

- 一、やる気をもち、自ら学習に励む子供
- 二、差別をみぬき、差別を許さない子供

おわりになりましたが、大切な作品を出品下さった方々、文化祭開催のためにご協力下さいました多数の皆様にも厚くお礼申し上げます。

三、生命を尊び、思いやりのある子供

どの学年の教室にも、この「めざす子供の姿」が掲示してあり教師も子供も、日常生活の羅針盤にしております。

自ら進んでやるというのと、やらされてするというのでは、物事に取組む姿勢が違います。科学技術の発展をはじめとする社会のめまぐるしい変化に伴い学校で学んだ知識だけでは、適応がむずかしくなり、生涯学習が叫ばれている今日、絶えず新たな知識や技能を学びながら、それを生かし、自ら解釈できる

力を付ける主体的な生き方が求められています。そのために、身のまわりの環境に関心を向けたり、積極的に働きかけようとする意欲を育て、自発的な学習の基礎となる力を付けることが大切になってきます。

幼児の、なぜ、どうしてを連発する時期を大切に、自らやりたい、やらなければならぬという子育てになるよう特に留意してほしいです。

小学校では、児童が学習の課題をもって、自ら学習するということを大切にしています。こうすることにより、わかる喜びがでてきて、次のわかれうとする意欲につながるのです。

本校では、平成五年度、六年度と、京都府と宮津市の実践推進校の指定を受け、取組みを進めてきました。子供の心をゆり動かし差別を許さない人間に育ててほしいと願っています。

好天に恵まれた十月十四日に研究発表会をもちました。京都

府内の小・中学校から、たくさんの参加者があり、全学年、授業を公開して、みてもらいました。参加された先生方からは、児童が主体的に自らの問題として学習しているし、学校全体が一つになって、人権擁護、同和問題早期解決に向けて、真摯な取組みができていると称賛していただきました。

十人十色といわれるように、それぞれの個人は異なるものをもっているのですが、その違いを認め合い、共に生きるという社会を作らなければなりません。

しかし、残念ながら、今なお残る差別について、人間として許されないことだという強い意志をもつて対処できる子供を育てたいと思います。これは、地域、保護者の皆さんの協力なしには効果を上げることはできません。大人も、たてまえは――

本音は――世間様が――などと言わないで、お互いに人権を大切に、住みよい由良地区を

築いていきたいものです。大切な命が、ともすれば軽く扱われる風潮もみられる昨今、この世に生を受けたことを喜び、命を大切にして、たくましく自

能面雑感

私は以前、趣味として謡曲を習い始め、自分ながらかなり没入したと思った時がありました。が、この頃より能の幽玄さに心をひかれておりまして、今度は目下初心ながら能面作りを習っておりですのでその雑感を述べてみたいと思います。

私は能楽堂や新能へ出かけ優れた能を観ることが無上の楽しみであります。会場は能の幽玄の雰囲気につつまれ、曲趣に合わせた緩急の謡の旋律と、素晴らしい囃子のリズムと、能楽師の研ぎすまされた演技の美しさ

分の人生を生きぬく、おもいやりのある児童の育成をめざしています。地域ぐるみの子育てをよろしくお願い致します。

小室 哲 寛

が一体となって美事に昇華し、見る人々を陶醉の境に誘いこむ演能は古典芸能の粹と思っております。

舞台における能面の表現力の豊かさは目を見はるものがあります。演者の巧みな技法により喜怒哀楽の情念を表します。これは面の精密な彫刻と絶妙な彩色とその心が演者の心と一つになって生きるものと思えます。

能楽師は演能の前に橋掛りの奥の鏡の間で能装束を整え、能面をおしいたいてから最後に面をつけ、そのままじっと鏡に

対峙^{たいじ}しているうちに、いつしか
実在の自分と一つとなり曲中の
人物になりきっていくのであり
ます。

私は京都の金剛流の家元の夏
の虫干しを拝見したことがあり
ます。立派な重文級の能面や衣
装がずらりと陳列され、年に一
度の拝観とあって、大勢の愛好
者がつめかけるのでありますが、
人の列におし流されていくと一ヶ
所で大勢の人が動かないで、し
かも物音一つたてないで滞^{とど}つて
いるところがあります。金剛家
の逸品「雪の小面^{こま}」の前であり
ます。皆の目が吸い寄せられる
ようにこの小面に集中しており
ます。実に不思議な魅力があり、
私もこの前で釘づけになってし
まいました。有名な竜右衛門の
傑作であります。秀吉愛蔵の
「雪・月・花の小面」の一つで
あり、五百年の時空を経て今尚
人の心を魅了する神秘的な面をま
のあたりに見て心から感動致し
ました。

能面を彫ることを「面^{おもて}を打つ」
と言います。これは面の姿を素
材の木の中から打ち出すという
精神的な響きがありますし、た
だ彫るのとは違うということで、
打つとはもつと緊張感の漲^{みなぎ}るこ
とであります。言いかえれば心
が素材を借りて面^{おもて}を表現するこ
となのであります。

面士^{おもてし}の歴史では今は摸索^{もくそく}時代
といわれております。面を打つ
者はその古面の心を体し、その
優れた姿を如何に如実に模写出
来るかということですが、之も
言われぬ表情や幽玄美の彩色を
忠実に写し作り出すことは実に
難かしい業^{わざ}であり、初心の私に
は及ぶべきもないところですが、
現在までに指導を受けながら何
とか五面（翁・小面^{こま}・孫次郎・
若女^{わかんな}・十六）作ることが出来て
自分では夫々に感慨があります。
面打ちの本懐は優れた古面の
作者の心理を知るとともに、そ
の時代に魂を遊ばせることが出
来ることであるといえます。

私も未熟乍らでも、その面の
表面的型式を重んじて習練を重
ねると共に、更にその面に籠め
られた作者の魂を感知出来るま
でになり、自己表現の作者が出

来ることを夢見ております。
ともかく、その面の象徴する
登場人物や物語りに思いをめぐ
らしながら面を作る楽しさは格
別のものであります。

芸能サークル発表会

琴遊会 一 会員

十月十六日、第二回由良地区
芸能サークル発表会が、盛大に
行われました。前日よりの、公
民館長様はじめ、役員の方々の
御苦労を思い、是非成功しなく
てはと強く思った次第です。私
達琴遊会の大正琴は、プログラ
ム一番。何事も一番が良い事だ
と自分にいい聞かせ、皆んなの
足をひっぱらないようにと、祈
る気持で大正琴にむかいました。
幕が開きいよいよ本番、緊張も
どこえやら、いつの間にか夢中
で弾いているうちに終わり、得
がたい体験、すばらしい思い出

になりました。後でお客様から
「よかったデ」と言われた時は
続けてきてよかったと思いまし
た。発表会にむけ、先ず選曲、
これは弾くのがむずかしい、こ
れは知らない曲だ等と和気あい
あいと進むなか、やっと曲も決
まり、由良で二教室の合同練習
にこぎつける事が出来ました。
先生の御指導のもと、いよいよ
練習開始、皆んな仕事、家事等
忙しい中、全員揃うことも余り
なくそれでも一生懸命練習をし、
成果を発表することが出来まし
た。思えば琴遊会に入っていた

だいてまだ年も浅く、指が動く
だろうか、両手の指が使えるた
ろうか、譜が読めるだろうか等
心配ばかりでしたが、やさしい
先生と皆さん楽しい方ばかりに
囲まれて練習の時も時間が早く
過ぎてしまいます。

大正琴の音色、四季折々の童
謡、唱歌に見せられて入った大
正琴ですが、今では琴遊会の皆
さんとの出会いがあり、ふれ合
いがあり生涯学習の一つとして
続けて行きたいと思っています。

芸能サークル発表会

まろじ会 松 林 友 子

初めて芸能サークル発表会に
参加させて頂きました。

脇地区では毎年、秋祭りの前
夜祭に婦人会々員が踊りを踊っ
ています。今年は芸能サークル

発表会にも参加する事になりま
したので例年よりも早くから公
民館で練習を始めました。磯野
先生にお世話になりました。発表
会当日を迎える事ができました。

会員の中には幼い子供さんの
おられる方や身内に病人のおら
れる方などいろいろですが、練

習日の夜には時間どうり集まっ
て頂いて、大変ではありまし
が充実感と満足感を味わって頂
いたかと思えます。

今年の踊りは「浜おけき」で
したので笠をかぶり、ゆかたを
着て踊りました。練習の時から
先生に着方の要点を教えて頂い
て皆さん自分で上手に帯が結べ
る様になりました。

私は日頃この様な緊張感を経
験する事がなかったので、どう
なるのかなと心配していました

が発表会に参加して練習の成果
を、地区の皆さんに見て頂くよ
い機会になったと思えました。
仕事や家事で大変、忙しいの
に習い事をして自分の趣味を生

かしておられるのだなと感心し
ました。
由良地区には「芸能サークル
発表会」という、すばらしい機
会があるのを初めて知りました。

芸能サークル発表会によせて

詩吟サークル 市 場 登志栄

私と詩吟との出会いは三年前
に逆のぼります。丁度仕事をや
めた年の六月、以前より友人よ
り勧められていたのでですが仕事
と趣味とを両立させる自信もな
くそのままになっていた詩吟を
始めてみようかなと思いつ

心、意味、情景が目の前に浮ん
で来る様な気になってまいりま
したがなかなかみんなについて
行けず「大ゆり」「中ゆり」と
言われてもうまく声のびず自
分流に声を出し、皆さんに助け
られての練習でした。一昨年の

たのがきっかけでした。以前母
が習っていたので少し聞いた事
はありましたが、声の出し方
も「ゆり」という言葉の意味も
わからない未熟な一年生でした。

先輩の皆さんと一諸に吟じてみ
たらと勧められ、一度はことわっ
ていたのですが、勇気を出して
挑戦してみる事に致しました。

先生や諸先輩の皆さんと親しく
おつき合ひさせて頂き、練習を
重ねていく内になんとなく詩の

発表会にむけて特訓し、皆んな

の気持が一つになり取組んで行く事はすばらしい事だなぁと感じました。今回私は書道吟だつたので書道の先生との呼吸がむずかしく、声も上ってしまい練習の成果を十分発揮する事は出来ませんでした。なんとか一年生なりに初めての舞台を終える事が出来ました。又、いい経

かかし座結成二十年

大森 経子

サークル活動が盛んなのには驚く。発表会に参加していない色々のグループも数多くあることでしょう。各々の先生に習って、磨いた芸を発表する発表会の中に混じって、私達のかかし座は全くの素人の集まりで、余興等に頼まれたらその都度集まって相談し、出しものが決まると一時間程練習し、後はおしゃべり。踊りが出来上がると衣裳の心配!

験をさせて頂きました。これを機会に上達する様、努力して生涯学習の発表の場として次回も、この芸能サークル発表会が開催される事を願う一人です。尚末筆ではございますがこの発表会の為にご尽力下さいました公民館の各役員様方に心より厚く御礼申し上げます。

役柄に似合う衣裳を探すのにひと苦労! あれでもない! これでもない! 色々持ち寄って貼ったり縫い付けたり、それはそれは大変な苦労! そうして衣裳が出来ると今度は小道具の工夫。これ又大変。これで大体の準備が完了すると最後はかかし座自慢の早変わり。着せ替えの練習。この様な苦心の末、踊りが完成するとみんなホッ……

とする。八名の座員の全員でつくり上げる創意工夫の創作舞踊! もう年だから止めよう。今年だけで来年は止めようと言いながら二十年の歳月が流れた。その間老人ホームへの慰問も何度か行って喜んでいただきました。時には失敗もあり大笑いするところもあるけど、思いがけない大好評の時は続けていて良かった。喜んでもらえて良かったと、気持ち良く反省しています。踊りの終わった後でビデオを見ながら、

芸能サークル発表会

照誼会 上田 照子

今年はじめ、由良の芸能サークル発表会に参加させていただきましたが、出場して、本当に良かった、と思っております。役員の皆様には大変お世話になりました。感謝しております。照誼会というのは、私が会主

色々反省したり、次回の参考にしたり思い出話に花が咲く慰労会があるから、ここまで続けられたのだと思います。一本足で田の中に立っている愛嬌のあるカカシ。私達も何時まで立つても一人立ちは出来ないであろうから、田の中のカカシの様に愛嬌のある、みんなから親しまれる様なグループになりたいとの願いを込めて名付けたかかし座の練習状況を紹介させていただきました。

の、謡や仕舞の稽古をしている会で、毎年、宮津で発表の会を持っています(茶六別館や宮津会館)。が、由良の会員にとつては、稽古の成果を地元で見たいだく機会がありませんでしたので、参加を申込んだのでし

た。しかし、発表会の日が近づくとつれて、気がかりな点が多く出てきました。舞台が狭くいか、マイクなしで聞こえるかどうか、また、華やかさの少ない、なじみのない謡や仕舞を、観客の皆様がどんな風に受取ってくださるか、ということなどでした。

いよいよ本日になり、演目が進行し次々とにぎやかに発表され、「仕舞」の番になりました。私と舞鶴の弟子の謡で、上田町子と上田かおりが舞ったわけですが、司会の方は、私の原稿を、わかりやすい話しことばで見事に正確に伝えてくださいましたし、また、観客の皆様はとても静かに見てくださったので、ほっとして大変ありがたく思いました。二人も、常の大会で舞う時よりも、地元なので緊張したようです。

来年五月二十八日には、宮津会館で舞囃子(笛・太鼓・小鼓・大鼓の伴奏で舞う)の会を催す

予定です。どうぞ、気軽においでください。稽古を始めてみられませんか。
由良に、こんなに多くの趣味

芸能サークル発表会

琴修会 岸 田 鈴 子

私が大正琴に出合ったのは、今から十年前になります。

久し振りに実家に帰省したとき、当時八十三歳の父が弾いて聞かせてくれた曲が「荒城の月」、「船頭小唄」、「さくらさくら」でした。その哀愁を帯びた美しい音色にうっとり聞きほれ、思わず感激したことを今でも忘れることができません。

それまでは音楽に興味があっても、時々カラオケを唄うぐらいで私にはこれといった趣味もありませんでした。私も父のよう健康で、すこやかに老後を送りたいと常々思っていました。

グループがあることを知り、由良の文化の一端に触れて楽しくなりました。仲間に入れて下さい。

父から指を使うと脳細胞の活性化になりボケの防止に役立つと教わり、大正琴の練習を始めた。

由良に住むようになってから、もすばらしい先生と良き仲間めぐまれ、楽しみながら四年目を迎えます。

今年の第二回芸能サークル発表会での選曲は前々より皆んなで話し合い「懐かしの歌謡集」をと決めておりましたので、先生に相談したところ、

「今回は第一回目の発表会にくらべ練習期間が短いため、私達には無理ではないか」とのこと

でしたが、皆んなの熱意が強く、とにかく一生懸命練習してやってみようということになりました。

いよいよ十月十六日の発表会の日がきました。今回は発表も二回目であり、前回よりは落ち着いてできるものと思っておりましたが、私達の順番になって先生到着が遅れ、発表することも先生のできるまで、発表の準備ができておらず、次の発表の方を先にしてもらおうとテーブルを片づけていたところ、先生が来られたので予定どおり発表することとなりました。又、テーブルを公民館の役員の方々に準備していただきました。

急いで席に座ると同時に幕が開き、挨拶をする間もなく曲が流れ始めました。気をもんだり、準備でバタバタしたために汗がどっと出てきてあせりましたが、弾いているうちに落ち着いてきて「人生劇場」「浜辺の歌」はもちろんのこと、心配していた「懐かしの歌謡集(三曲)」

ともどうにか思いどおりに弾くことができ、練習の成果を十分発揮することができたと皆んなで喜びあいました。これもひとえに、練習時に演奏時の姿勢、大正琴の位置、ピックと弦が水平に当たる様にと、細かく指導していただいた先生のお陰と感謝致しております。

今後とも大正琴を生涯の趣味

由良神社祭り前夜祭を計画して

浜野路 大 森 章 弘

今年初めて秋祭りの前夜祭を行うという計画は、発足したばかりの浜野路青壮年会今年度活動方針に取り上げました。

そして去る八月に自治会、婦人会、公民館分館、子供会役員の方々に会議に加わっていただき、御協力を得ることになりました。九月に入って実施具体案を協議していただきました。先

として、良い音色を響かせることができるようけい古にはげみ、指を動かさしつづけたいと思っております。

芸能サークル発表会を企画して下さった公民館の役員の皆様、又準備をしていただいた多くの皆様大変お世話になりました。感謝の気持ちで一杯でございます。有難うございました。

ビールケースの上に板を渡して座席にしました。

クイズ、カラオケ等、子供も御老人も楽しんでいただきました。賞品としては、商店、食堂、旅館、その他企業にスポンサーとして賞品券や食券、その他品物を寄付していただきました。模擬店も好評で、すぐ売り切れしました。沢山追加した分も完売し、会員役員お手伝いの皆様一同大忙しで頑張りました。特にうどんは婦人会の方にお世話になり、祭の御馳走の準備等お手の用事も多忙な中、御無理お願いしました事、申し訳なく思っ

ています。

カラオケには他地区の方や、他所に住んでお祭りのため里帰りした人達も出場して楽しんで下さいました。子供達も大きくなって由良を離れて暮らす様になっても懐かしい思い出として残る事と思います。度々会議を重ね準備のため何かと苦労しました会員役員一同、盛大な前夜祭が好評裡に終わった事に満足し、又来年も続けようと意欲を燃やしています。御協力いただきました方々に紙面をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

みやづ女性スポーツフェスティバル

木 村 すなを

第八回を迎える「みやづ女性スポーツフェスティバル94」が十月二十三日宮津市民体育館にて行なわれました。

今年、宮津市制四十周年と

いう記念の年に当たり、協賛事業として盛大に開催され、「広げよう女性の輪を」をテーマに、宮津市の女性の方がたくさん参加され、実施されました。

由良地区からも多くの人達が参加され、みんなのファイトと協力で、準優勝という良い成績をおさめることができました。忙しい毎日を送っている私達ですが、いろいろな取組みを通して多くの人達と出会い、楽しい一日を過ごすことができました。

四季折々

中西 富志

水ぬるむ川の岸边に春待てる猫柳の白き芽はふくらみぬ
 海荒れてサーファー達は岩上に波かぶりつつ救い求むる
 散りしける桜の花を手に掬い風吹く中に幼は放つ
 春かすみ遠山桜しろじろと咲きみちて時は移ろいゆくや
 朝夕の散歩は老の日課にてそよ風の野を露ふみてゆく
 五十年を花に水やるわが生活水なくて戦死せし夫を忘れず
 川沿いに今年また咲くねむの花ピンクの暈のほのゆれており
 柿の実のたわわに赤き道沿いは食糧難の戦時偲ばす
 あわだち草国道沿いに群生し毒花と聞くと秋の美景か
 修羅いくつ乗りこえ来たるこの身なり一人し病めば佗しきつもの

由良地区文化祭に出品して

大森 万喜子

六十五歳を過ぎ何一つ趣味のない自分を見て何か一つと思いい立ち、老大の短歌クラブに入れて頂きました。

月日がたつにつれて自分の短歌が書けたらと思いい、大槻美都先生に短歌も書道も手ほどきをうけました。初めは右手が痛く書くのも大変でしたが乗りこえて今日になりました。

由良地区文化祭の出品の事を聞き一度でも出せたらと勇気を出してはじめて出品いたしました。本年を有意義にすごせたと感じたと思いいます。

皆様のお目にとまり有難うございました。

お世話になりました皆様にくお礼申し上げます。

文化祭

三嶋 昌子

十一月六日、「さあみんな頑張ろうで」の掛け声と共に文化祭の幕開けです。この朝、早朝からのどしゃぶりの雨も皆の氣迫に圧倒されたのか始まる頃に

は、すっかり上り、風も無く穏やかな一日となり、ほっと胸をなでおろしました。前日からの準備もすっかり整い、お客様を迎える前の緊張が走ります。時

間が経つにつれ、老若男女、大勢の人達で大変な賑わいと成り「うどん一丁おたべ!」「よっしゃ」。目の廻る様な忙しさの中に掛け声と笑い声が響き、和やかな中にもさすがは主婦ばかり、それぞれの役割を手際よく熟して行きます。即売所の前ではあれこれと品定めをする人と売り子の楽しいやりとり、コーヒーションで話しに花を咲かせる人、うどんやぜんざいを食べながら談笑する人、久し振りに会ってお互いに健康を確認し喜び合う光景等、あっちこっちで人と人の和が広がり会場に活気がみなぎり、「ええ味やったで」「ようけ買うたは」の言葉に感激し「一服のお茶」のねぎらに感謝し、「素晴らしい出来映えの展示品の数々」に感心した文化祭でした。

年に一度、由良中の人々が集うこの文化祭にいろいろな面から協力して下さった方々に深く感謝し、そのお陰で、この行事に参加してみんなと一緒にやり終えたここち良い満足感を味わう事が出来ました。

いろいろと大変な部分も有りましたが地域社会活動に参加する事により、会員相互の連携が一層深まり、豊かな心と豊かな地域づくりに少しずつでもお役に立てばと思ひ、地域の中の婦人会活動を実感した一日でした。

お茶席に出て

千 阪 幸 子

十一月六日、今年度の文化祭が行なわれました。私はもちろん、たくさんの人々が今の日を楽しみにしていただろうと思えます。

私は、午前中お茶席に出ていました。「お盆立て」というお手前をすることになっていました。でも、まだ一度も練習をしていなかったの、岡田さんと、「上手に出きるかな。」えっと、「ここはどうするんかいな。」と、ささやき合っていました。そして私の番がまわって来た時、祖父母が、同席しました。

「はずかしいなあ。」と思っていました。また、している人、友達もきてくれました。

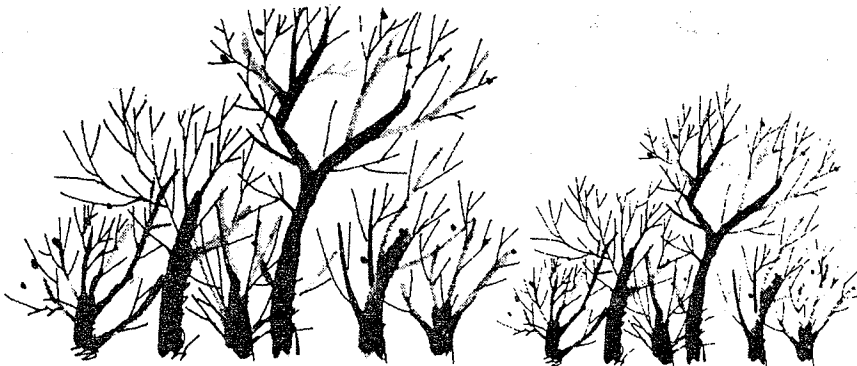
「幸ちゃんがおるでびっくりしたで。」

「もう、おかしかった。」

「もう、おかしかった。」

私は、文化祭がおわって、こんな時ほど、「お茶を習ってよかった」とも思います。それは、たくさんの人たちに、お茶の楽しさを知ってもらえるからです。また自分の日ごろの練習のせいかを出せる場でもあるからです。

これからもなにことも一生懸命していきたいです。そして地区のみなさんとより多くの交流がもてるとうれしくおもいます。



四部對抗球技大会

山元久紀

夏期球技大会に思う

山下正貴

昨年(平成五年)は雨天の影

響で中止になりましたが、今年

は無事終えることが出来ました。

私の地区三部は野球は一回戦で

健闘空しく敗れましたが、ソフ

トボールは優勝することが出き、

二年振りの優勝に感慨もひとし

おでありました。

公民館体育部の役員として野

球、ソフトの選手集め及び集合

時間の連絡等大変でしたが終わっ

てみれば、その苦勞も嘘のよう

に消え去り試合の出来た安堵感

で一杯になりました。我がソフ

トボールの出場選手も当初、地

区在住者を中心に構成しました

が、久しぶりに帰郷された方も

観戦に来られ出場してもらいま

しました。その中で選手同志の旧

交をあたためあい、ふれあいの

場として大いに盛り上がり有意

義な大会となりました。

今後この大会が旧交の場と

なり帰郷することが楽しみにな

るようになれば盛り上がるもの

と考えます。

最後に大会運営の中で再考の

必要があると感じた事を述べま

す。

それは、出場選手に対する参

加賞等の授与に関してでありま

すが現状は閉会式の場で渡され

ますが、一回戦で敗退した選手

は既に会場にいない状況にあり

参加賞等の配布が役員の仕事と

なっております。くわえて会場

の跡片づけ等の役割もあり配布

が負担となります。そこで、提

案ではありますが参加賞につい

ては敗れた段階で授与するよう

にすれば、少しでも役員の負担

が軽減されると思います。

今年も例年どおり八月十四日

早朝より、由良小学校グラウンド

におきまして四部對抗球技大会

が開催されました。

今回の大会は記録的な猛暑の

中でのゲームになり、選手の皆

さんには本当に大変だったと思

います。野球・ソフトボール共

に好プレー、珍プレーが随所に

見られ、観戦者の方にも充分案

しんでいただけただけ大会であつた

と思います。今後共御盆休みに

毎年行なわれますこの球技大会

をさらに充実したものにし、地

区の皆さんが進んで参加できる

よう私達公民館役員も努力して

いかなければならないのは当然

ですが、地区の皆さんも、もっ

と積極的に参加しよう、みんな

で盛り上げて行こうという気持

ちがもう少し欲しいと思います。

た。

由良地区も若者の人口が減少

し高齢化社会になってきました。

特に野球は選手が集まらない、

集まりにくいという話をよく耳

にします。今後この球技大会も

選手がいけないからという理由で

開催が危ぶまれる時代がやって

来るかもしれません。

しかしそれならば野球やソフ

トボールというように種目を限

定しないで、若い方はもちろん

のこと年配者の方でも気楽に参

加できる種目に変更すればこの

問題は解決できるのではないで

しょうか。要は続けていくとい

うことが大切なことだと思いま

す。

最後になりましたが、公民館

長さんをはじめ、選手役員の皆

さん本当にご苦勞さまでした。

文学の見える風景(五)

三島由紀夫「金閣寺」その一

中西夏江

小説「金閣寺」は、京都鹿苑寺の有名な金閣が、寺僧の放火によって焼失した事件（一九五〇年）を素材として、六年後に書かれました。

単行本に映画にと、当時は多くの批評家から推され、私達は小説を読んだり、個人的な放火僧をスクリーンにみて驚いたり、戦慄を覚えたりしたものでした。作者三島由紀夫は、一九二五年生れで、一九四五年二十歳で敗戦にあい、一九七〇年四十五歳で自ら命を絶しました。頭脳明晰、理詰めの構成家、論理家であり、「潮騒」「絹と明察」「サド侯爵夫人」等々、多書を刊行、鮮やかな手腕の持ち主であつたと記されています。

「金閣寺」の放火事件が起こつ

たとき、評論家小林秀雄氏は、その年の春、金閣を最後に見たときの風景を、

「境内は、何一つ変わっていないが、見物の方には新風俗が見られた。青苔を踏みじり、女を追う紳士、赤松に攀じ登り、下のカメラにポーズする女性、石を拾い、池に向かってピッチングの練習の如きものをする学生。鹿苑寺の番人達は、声を囁かして怒号するが、衆寡敵せぬ有様で――」

と、敗戦による乾いた断絶の意識や行動を描いています。

更に作家中村光夫氏は、
「このような状況の中、放火犯人が、この『新風俗』のどこからでてきても、また、この『新風俗』を若い三島が、もっと自

分に近いものとして、あるいは、自分をその中の一人として感じたいでしょう」

と述べ、佐伯彰一氏は、

「金閣寺という日本の伝統美の象徴ともいえる建築の破壊へと駆り立てられる主人公の内的な動因のうちに、敗戦は欠くべからざる重要な一環としてしかと組みこまれている。――略――敗戦によって、頼るべきものを失った日本人に、自国の美的伝統は奇妙に二重性をはらんだ厄介な対象と化した。一方では、自信回復のためのほとんど唯一の手掛かりであると同時に、焦ら立たしいかぎりの内的呪縛の象徴ともうつつた。そうした伝統に対する愛憎共存の微妙なアンヴァレンス（両面価値）を、三島は『金閣寺』において、まことに鮮やかに小説化して見せたのである」

と記しています。

三島由紀夫は、その放火僧を「私」――溝口という少年で登場

させていきます。溝口が、やがて由良の海をみながら『金閣を焼かねばならぬ』という想念をもつに至る伏線が、美しく優れた本文の冒頭を飾っています。（以下新潮文庫）

P5 幼児から父は、私によく、金閣のことを語った。

私の生れたのは、舞鶴から東北の、日本海へ突き出たうらさびしい岬である。父の故郷はそこではなく、舞鶴東郊の志楽である。懇望されて、僧籍に入り、辺鄙な岬の寺の住職になり、その地で妻をもらって、私という子を設けた。

成生岬の寺の近くには、適当な中学校がなかった。やがて私は父母の膝下を離れ、父の故郷の叔父の家に預けられ、そこから東舞鶴中学校へ徒歩で通った。父の故郷は、光のおびただしい土地であった。しかし一年のうち、十一月十二月のころには、たとえ雲一つないように見える

快晴の日にも、一日に四五へんも時雨が渡った。私の変りやすい心情は、この土地で養われたものではないかと思われる。

五月の夕方など、学校からかえって、叔父の家の二階の勉強部屋から、むこうの小山を見る。若葉の山腹が西日を受けて、野の只中に、金屏風を建てたように見える。それを見ると私は、金閣を想像した。

写真や教科書で、現実の金閣をたびたび見ながら、私の心の中では、父の語った金閣の幻のP6 ほうが勝を制した。父は決して現実の金閣が、金色にかがやいているなどと語らなかつた筈だが、父によれば、金閣ほど美しいものは地上になく、又金閣というその字面、その音韻から、私の心が描きだした金閣は、途方もないものであった。

なす吉坂峠は、丁度真東に当たっている。その峠のあたりから目が昇る。現実の京都とは反対の方角であるのに、私は山あいの朝陽の中から、金閣が朝空へ聳えているのを見た。

こういふ風に、金閣はいたるところに現われ、しかもそれが現実に見えない点では、この土地における海とよく似ていた。舞鶴湾は志楽村の西方一里半に位置していたが、海は山に遮ぎられて見えなかつた。しかしこの土地には、いつも海の手感のようなのものが漂っていた。風にも時折海の匂いが嗅がれ、海が時化ると、沢山の鷗がのがれてきて、そこらの田に下りた。

P8 中学の先輩の、舞鶴海軍機関学校の一生徒が、休暇をもらって、母校へあそびに来た。

「略」 P9 「何だ、吃りか。貴様も海機へ入らんか。吃りなんか、一日で叩き直してやるぞ」 「略」 「入りません。僕は坊主になるんです」 皆はしんとした。

「略」 「ふうん、そんならあと何年かで、俺も貴様の厄介になるわけだな」 その年はすでに太平洋戦争がはじまっていた。

この小説には、 P18 金剛院は名高かつた。略「左甚五郎作と伝えられる優雅な三重塔のある名刹である。」

と、舞鶴市鹿原の金剛院が登場します。 P12 P22が悲劇の舞台となっています。

やがて父の遺言により、金閣寺の徒弟になった溝口は金閣を愛します。

しかし、次第に金閣に対する想念は変わっていきます。

P51 昭和十九年の十一月にB29の東京初爆撃があつた当座は、京都も明日にも空襲を受けるかと思われた。 「略」 明日こそは金閣が焼けるだろう。(略) P68 敗戦の衝撃、民族的悲哀などというものから、金閣は超

絶していた。 「略」 金閣は無益な気高い調度品のようにしんとしていた。

P165 私は寝静まった寺のように金閣が眠っているのを見たことがない。 「略」 私は金閣にむかって、生れてはじめて次のように呼びかけた。 「いつかきつとお前を支配してやる。」

「お前をわがものにしてやるぞ」 P189 「自分のまわりのもの凡てから逃げ出したい。自分のまわりのものがぶんぶん匂わしている無力の匂いから。……老師も無力だ。ひどく無力なんだ。それもわかつた」

P190 「金閣は無力じゃない。 「略」 しかし凡ての無力の根源なんだ」

こうした不如意と不安を抱きながら京都駅を立ち、舞鶴へ来ます。 P200 P211は由良がその舞台となつていきます。(次回へ)

郷里に於ける澤井市造話題(九)

作 中西 孫兵衛(先々代)

由良の歴史をさぐる会 四方 寿 朗

此話を沢井君が聞かれて或時海岸造工専用の石材を見に来たとの事で私は其夕網漁に出づる準備として網仕事最中にやつて来られ「ヨイ何をして居るがぐづくした事は止めよ時に聞きつらん過日大石が来て第二回國債配當を頼むといふから承知して置たがあれを郡長の言ふ事を聞くと大に尤だ此村にも六右衛門といふ資産家があるからね其人を差措て引請る杯は此方の出来すぎであるから止さうじやないか君より皆さんへ此旨傳へて呉れと言放たれしには実に閉口せりあれ程迄に村中が悦び騒いで其徳を謳歌して居るにも係らず突然中止したなどと言ひ出さるべきは義にあらず又如何斗失望落胆するやも知れずと種々に説

明陳述に力を尽せしかどもウウソくとはかり頭を左右に振るひ思を翻す容子なし是は一策を講ぜずばあるべからずと何時頃帰るかと問へば午後一時か二時迄には帰り来るべし帰途再訪せんとの事故取敢ず急ぎ役場へ立寄り呉れと約束し直に役場へ馳付け迅速議員区長を召集し右の次第を話し沢井氏茲に立寄る筈に付其節は何分にも頼むとの一点張にて叩頭哀求致されよと旨を含め待受たる処君も亦約を履みて立寄多数の人が異口同音只管頼むくと平身低頭せられたるに流石矢も楯も盡き詮方なかりしと見え遂に其場にて指輪に嵌せる認印を申込書に押捺せられ衆皆ホツと一息漸く愁眉を開きしとぞ

其二

小室の老母よりの小言を避ける手段にてありしならん老母は此頃より私方へ小言をならべに来らるゝ事屢々にて曰く沢井が云へりあなたが話あれば孫兵衛に言はれよ我より頼んでもあり彼はヲレの胸中何もかも承知して居るヲレに言ふも彼に言はるゝも同然だ遠慮には及ばんヲレと思ふて彼に云へと聞いて居ますも

然るに私は右等の事は沢井君より何等聞及び居らねと間に合に「承知してゐます何なりとも承ります」と申て居ました事に依ると「わたしは此家の孫分なれば此家へ来るは當然で遠慮に及ばず」なぞ語らるゝ事さえあり要するに沢井君も此頑強なる老母に英鋒を挫き反て其鋒先を私に向けられしなるべし私が澤井君に向て「君は狡猾いぞ老母の突鋒の餘鋒を僕に向はしむるには僕も弱るでないか」と言へば沢井君は只寛爾として笑を漏す

のみ一語もなかりき

其三

往年由良の道路工事の際来りて「君も我々の仲間(沢井組を云)にする積で計画した事もある村の人が相手にならぬので君は其儘居るのだ若し彼の時話が出来たならば今頃はヲレと斯ふして土方商賣で浪人になるのである」と笑ひ又曰く「若しヲレが君にてあらば何々博士とか何とか云ふ立派な肩書を有する人となりしものを」と笑はれたから私も屈せず「僕が君であらば天下の大事業家の泰斗と仰がるゝ大名譽を有する人となりしに」と答へ大言壯語を交はし談笑に時を費せし事舞鶴に滞在中幾度も呼寄せられし都度之を演じたり三十八年の秋迄に工事も略片付けりと思へど誤りあるやも保し難し
拾 貳
明治三十九年も漸く暮なんとする頃沢井君電報を台湾より送り来る何事ならんと披見すれば藤

吉氏一身上及経済状態と至急に取調べとの依頼なり即ち仙太郎氏に通じ氏と但に問題に着手せしが一方藤吉氏容易に実を語らず引続き沢井君よりの郵書も来る此書状によれば藤吉氏は一旦家を仕舞家内は里方たる本家へ預け自身は台湾に渡り一身を捧げて使役に供す何分多額なる負債にて如何とも整理すべき策術に尽きたり云々との手紙藤吉氏より送られたるもの及び沢井君の立服手紙等にて殆んど其眞像を看破し得たれば之を攻撃の要具として取糺しに従ひ稍其事実を確め此答の結果として負債償却の方法を講ずるより妙薬なし依て一時沢井君より出金を乞ふ事として其意見を披陳して数々昭会を重ね漸く沢井君も承諾ありて難件も一先づ落着となり是を機として藤吉氏の素行も改まり其後石材売買業を始め眞面目に従事せしかば稍営業の曙光を認むるに至れり私は年月を忘れしが藤吉氏より負債償却を営業

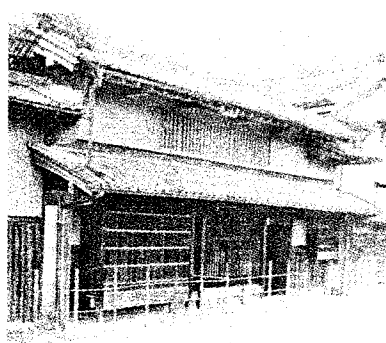
資金との関係を熟査せられ負債の償却は自身の義務を全く果し畢え是に替るに営業の資本を沢井君に仰ぐ方法に致したしとの相談を受け私も同じ貢ぎて貰ふからには名義宜しからんと考へ賛同を表したれば藤吉氏は好事魔多し速に親父に相談したしとて深夜私の寝眠を犯し明朝大阪に登り親父に相談したけれど意見のある処を書面に認め呉れとの事にし拒むべくもあらねば遂に其請に応じました斯くて其話も沢井君の承諾する処となりて現今にても実行されつゝある次第なり其後沢井君より藤吉氏其後の実況如何を尋ねられしには聊か困却せり其故は毎々視聴を聳して居ませぬから大略の見込位のみより答ふる能はず愈追究せらるゝに及び実に答に困りたり既に

く新造られし船天災にて破損せしかば巨額の損害を来たせり若し此不幸災害なかりしならんには大に誇稱するに足りなんものを惜しき事してけりと申せば此秋由良に行き徐々検閲を遂ぐべしと何処とやら満足の色慰安の体に見受けしが呼々今や其人去りて魂魄孰れの空をさまよふらん悲絶惨絶語るも亦涙の潜然たるを禁じ得ず

拾参

茲に悲惨なる出来事を生ぜしは明治四十年の凶報なり妻はる女の訃音にて元より病氣なりしが遂に死去せられ大坂に於て勤めん沢井君の意志是を見ても本人が如何に郷里を景慕せられ居りしかを想像するに餘りあり此本葬に付電報を以て私に登坂を求め来れば直ちに応着すれば葬式の事にて頼むとの事去らば如何処置すべきやと問えば萬事を委ねて貴意に任す問ふも無用亦た合ふる理なし独断事に当れと私も実に困りました其式の程度及

経費の見込は素より作法なり式の法等は幸に松原寺方丈も居合され帰国の上にて調査し得べきも普通一般の葬式とは其趣を異にし殊には東京大坂台湾其他各地よりの会葬者もあれば若し違式無作法等処置あらんか独り僕自身の責めのみかは延て沢井君の面目を毀損するの恐入なり。



澤井組大阪本店

〔訂正とおわび〕

由良公民館だより93号21頁二段目二行目と、三段目八行目をそれぞれ次の様に訂正し、御精読と御指摘を感謝いたします。
十二点鏡 ↓ 十二点鐘
積愛雲散 ↓ 積憂雲散 (四方)

川柳

宮津番傘川柳会

しきたりの下絵を守る座りだこ

今風の受け皿老いの絵の具溶く

マンネリから抜ける換気をしてみよう

河は流れる神の筋書きそのままに

背が寒い風の足音かもしれぬ

思慕の糸冷えたことばが切り捨てる

田村 キヌエ

大森 美智子

飯 沢 鳴 窓

編集後記

長年にわたり、由良地区公民館長として、公民館事業の発展に尽くされて参られました「藤本先生」が永眠されました。先生の在りし日を偲び、深く哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

文化祭事業として取り組みました「芸能サークル発表会」も盛会のうちに幕を閉じることが出来ました。懸案でありました舞台の幕も、中西まさ子様、中西夏江様のお骨おりにより新調することが出来ました。縫製は、すべて中西まさ子様の手によるものです。また、「サークル」かゝし座」さまから、敬老会等での謝礼金の貴重な蓄えを、ご寄付下さり有り難く頂戴し、幕の新調に充当させていただきました。紙面を借り厚くお礼申し上げます。

この公民館だよりが、皆様の

お手元に届くことは、年の瀬も迫り何かと心せわしい頃と思います。夕食後のストーブや、炬燵を囲んでの団らん折の話題の種にでもして下されば幸いです。地区の皆様元気でよいお年をお迎え下さい。(山下記)

